2021年、名古屋大学医学部は創基150年を迎えました。
長きにわたる医学部の歩みを振り返りつつ創基150周年に関連した取り組み、
今後の展望について門松健治研究科長と木村宏副研究科長に語り合っていただきました。

創基150周年の飛躍

周年を機に基盤を整備し、世界屈指の研究大学として飛躍を

【対談】

門松 健治 × 木村 宏

医学系研究科長・医学部長
九州大学大学院医学研究科博士課程単位取得満了。医学博士。
名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長、医学系研究科教授。
専門分野は神経科学一般、病態医化学。

副研究科長
名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了。医学博士。
同医学系研究科教授。専門分野はウイルス学、小児科学。
創基150周年記念事業準備委員会委員長。

激動の歴史をくぐり抜け 地域の皆さんに支えられた150年

門松：名古屋大学医学部は、1871年に開設された名古屋藩の仮病院・仮医学校をルーツとします。その後、明治維新による廃藩置県、濃尾大地震、第二次世界大戦と激動の歴史をくぐり抜けて、2021年に創基150年を迎えました。大学の発展を振り返ると、大きな出来事の一つが1939年の名古屋帝国大学の創立です。最後に設置された帝国大学であり、地域にとっては念願の総合大学の誕生となりました。その施設のほとんどが愛知県からの寄附で建てられたもので、地域の皆さんに支えられて今日があると言えます。

木村：仮病院・仮医学校の開設後、名称を変えながら存続し、1901年には愛知県立医学校となっていますので、当時から愛知県の手厚い支援を受けていたことがうかがえます。さらに歴史をさかのぼると、本学医学部をはじめ150年以上の歴史がある医学部は、その多くが天然痘の治療や予防接種を行う種痘所の設置が発端だったと聞いています。当時、各藩は漢方医学が中心でしたが、種痘所が西洋医学導入のきっかけにもなりました。

門松：そうですね。実は本学医学部の始まりも1852年に尾張藩が種痘所を開設したことにあると思われます。ただ、残念ながら具体的な資料が残っていないため仮病院・仮医学校を創基としています。当時の人々にとって天然痘は恐ろしい感染症。それを防ぐ種痘所の貢献により、病院や医学校が社会に不可欠な存在であることが人々に認知され、仮病院・仮医学校の開設につながったのではないかと想像します。また、天然痘はワクチンによって人類が初めて克服した感染症でもあり、その意味でも新型コロナウイルス感染症との戦いが続くこの時に、150周年を迎えたことには意味があると感じています。

医学部150周年の記念として 心の拠り所となるキャンパス整備を

門松：150周年を記念する取り組みとしてさまざまな事業を計画していますが、その一つがキャンパスアイデンティティの実現に向けたキャンパスの整備です。

木村：現在、計画を進めていますが、鶴舞キャンパスは1914年に堀川沿いの天王崎町から現在の地に移転して以来、発展を続けてきました。ただ、敷地に近代的な建物が林立し、学生や教職員の拠り所となるような建造物が少なかったため、その部分を強化したいと考えています。卒業生の方々の寄附で植えられたメタセコイアの並木道は鶴舞キャンパスのランドマークとして位置付けられています。このランドマークを活かして医学部のメインストリートを新たに整備し、エントランスとなる正門、ストリートの先には学生が気軽に集えるような学生広場をつくりたいと構想を練っています。

門松：おっしゃるとおり、本学医学部は日本で最も古い医学部の一つであるのですが、鶴舞キャンパスの建物は増改築を繰り返し、100年以上の歴史を示すものがわずかしかありません。しかし、医学部としてのアイデンティティを持つべきであり、そのシンボルになるものを考えると、メタセコイアの並木道は 100年経っても手を入れることなく残るだろうと思っています。ぜひ、アイデンティティにつながる風景をつくりたいですね。

木村：施設面では周年事業の一環として、2021年4月に図書館内に医学部所蔵の貴重な資料を集めた医学部史料館が完成しました。例えば、世界で初めてヒトの汗を本格的に研究した久野寧教授が開発した「人体発汗天秤」、現在の内視鏡の先駆けとも言える「桐原式軟性胃鏡」、外国人教師ヨングハンスによる日本初の植皮手術の錦絵、医学部ゆかりの人たちが描かれた「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」などを展示しています。昔の校舎や当時の診察の様子を見ることができる仮想現実（VR）装置も備え、いずれ市民の方々にも披露していく予定です。

各教室の歴史を受け継ぎ 先人たちの記録を次の世代へ

門松：もう一つ大切な事業として、150周年史の編纂を進めています。私自身もそうですが、教授着任当初は自分の教室の成り立ちなどはあまり知らないわけですが、これまでにつくられた年史には各教室や医学部の歴史などが記載されていて、それを読むことで医学部の発展の経緯や先人たちの考えがよくわかります。やはり我々の次の世代、さらに次の世代にも役立つように記録を残し、歴史を後世に伝えていくことは非常に重要です。特に医学部は多くの教室に連綿と続いてきた歴史があり、それが現在の診療科にもつながっていますからね。

木村：おっしゃるとおりです。各教室によって歴史は異なり、100年以上の歴史がある教室もあれば新しい教室もありますが、教室ごとに年史をつくったり同門会を結成したりと、同門の絆が深いのは医学部ならではですね。

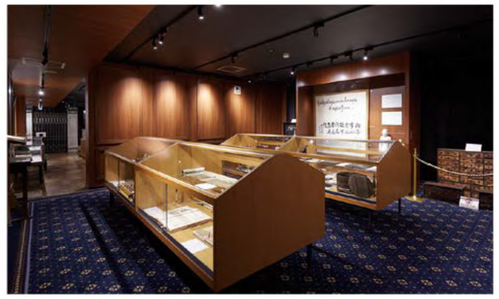
名古屋大学医学部 150周年記念
150th anniversary of foundation of Nagoya University 創基

やはり、節目節目で年史を残していることは重要ですし、150年という長い歴史を振り返り、こうした形に残せることは幸せなことだと思います。

門松 ： これも今日まで地域の皆さんによって支えられてきたおかげです。ぜひお礼を申し上げたく、150周年の記念行事を開催して皆さんをお招きし、一緒にお祝いできればと思っています。

木村：記念行事は新型コロナウイルス感染症のため当初計画を延期して12月に開催となりましたが、市民公開講座やオープンキャンパスを行い、地域の皆さんに名古屋大学の今や各教室の研究内容を知っていただきたいと考えています。また、OBOGの講演や学内サークルの演奏会、職員による病院内でのミニコンサートなどの多彩な催し、豊田講堂での記念講演など行事を企画しています。

門松：こうした事業や基盤整備のために、医学部では基金として「創基150周年医学部基盤整備支援事業」を立ち上げ、OBOGの方や広く県民市民の皆さんにご寄附をお願いしています。医学部の歴史を受け継ぎ、さらなる医学・医療の発展を目指すために、ぜひご支援をいただければと願っています。



日本の大学のモデルとなる東海国立大学機構

門松 ： 今後の展望としては、まず岐阜大学と設立した東海国立大学機構※1の教育・研究活動の推進が挙げられます。別々の文化を持った大学の連携には高い壁が立ちはだかりますが、大きな可能性があると感じています。18歳人口が減少し、もはや全ての大学が生き残れる時代ではなく、今後30年もすれば医学生の数も今の7割で十分という時代になってくるでしょう。そうした将来を見越して研究大学として生き残っていくためには、スケールメリットを活用する必要があります。そこで、医学部では「グランドデザイン2020」も岐阜大学と一緒に検討し策定しました。東海国立大学機構を日本の大学文化を変えるモデルとして成功させるためにも、連携を密にしていかなければなりません。

木村 ： 連携は全学で多角的に進めることになりますが、まずは教育がスタートになるだろうと考えています。特に、医学部では教育の共通項が多いので取り組みやすく、成果が期待できると考えております。

門松 ： また、研究面では臨床研究を一緒に進めていきたいと思っています。本学ではAIを使った医学研究が進んでおり、肺繊維症の診断などにおいて成功例も出ています。研究成果を岐阜大学とシェアすることで、さらに研究が進展していくものと確信しています。

人類に貢献し世界を変える研究を名古屋大学から発信する

門松 ： 研究大学としての未来を考えると、2018年、指定国立大学法人※2に選ばれたことは大きな出来事でした。指定国立大学とは旧帝国大学に変わるブランドとして国が考えたもので研究力や社会連携、国際協働などさまざまな指標で大学を評価し、世界最高水準の教育研究活動の展開が期待できる国立大学が選ばれています。

木村 ： 指定国立大学は国が認めた日本有数の大学であり、国際的な競争環境の中で、世界の有力大学と伍していくために教育研究を集約させ、資源も集中させていく取り組みでもあります。

門松 ： 本学医学部のミッションとしては、仮病院・仮医学校時代から受け継がれている地域医療への貢献があり、それは今後も変わることなく堅持していきます。ただ、それだけではなく日本を代表する研究大学として、新しい医学・医療の開拓を推し進めることも我々の使命であり、果たしていかなければなりません。

木村 ： 今、さまざまな研究が展開されていますが、まずは本学が強みとする分野、例えば神経疾患やがんなどに関する研究を突破口に、創薬や新しい医療の開拓を進めていくアプローチがスムーズではないかと考えています。150周年の基盤整備によって研究活動が一段と活発になり、基礎と臨床を結ぶトランスレーショナルリサーチも加速すると期待しています。

門松：これまでの歴史を振り返っても、実際、本学医学部には新しい医学や医療を開拓できる土壌はあると感じています。史料館の話の際にお名前が出ましたが、発汗の研究をされた久野寧先生は研究成果によりノーベル賞候補に3回程選ばれていますし、回転横断断層撮影というCTの元祖になる考え方を提案されたのは本学の高橋信次先生です。骨髄移植についても本学が日本の中では先鞭を切るなど、先輩方がいろいろな分野で足跡を残しています。我々も後に続きたいと考えていますが、そのためには研究や教育などすべてにおいて教員や医師が常に高みを目指すメンタリティーを持っておくことが欠かせません。新しい医学・医療の開拓を合言葉に、「自分たちが成し遂げ、名古屋から発信していくのだ」という心構えや文化を醸成していくつもりです。

木村：150年の歴史を見ると錚々たる方々が先輩におられて素晴らしいですね。この歴史を誇りに思うと同時に、我々は一層力を入れて先輩方に続くような学生を育てていかなければなりません。

門松 ： 私自身は研究力の象徴としてノーベル賞受賞者を輩出したいという思いがあり、新任の教授陣には必ず「ノーベル賞を目指してください」と激励しています。もちろん、それは受賞が目的ではなくノーベル賞に象徴されるような人類に貢献し世界を大きく変える仕事をしてほしいという願いからです。既に本学は6人のノーベル賞受賞者を輩出していますので、賞自体が身近になったのは間違いありません。しかし、鶴舞キャンパス、つまり医学部からはまだ受賞者が出ていませんので、ぜひ輩出したいと思っています。

木村 ： 私見ですが、ノーベル賞級の新しい発見をするには、環境の効用もあるのではないかと感じています。ノーベル賞受賞者を輩出した理学部や工学部を擁する東山キャンパスには緑豊かなグリーンベルトが広がり、そこで学生は伸びやかに育っています。自由な発想で研究をする学生を育てるにはいろいろなゆとりが必要ではないか、と考えています。ゆとりを生み出すためにはキャンパスの環境も大切で、先ほどもお話ししましたが、学生がリラックスして考えを巡らせることできるためにも学生広場などの空間をぜひ整備したいと考えています。

門松 ： 確かにそうかもしれませんね。国も世界との競争が激化する中、個人の自由な発想による研究を支援しようと、2020年から創発的研究支援事業※3をスタートさせました。医学部からは助教から准教授まで5名が採択され、多様な人材が選ばれていると実感します。もちろん、彼ら以外にも優秀な人材が大勢いますから、そういった若い人たちに研究の場を与え一緒に集まれるようなコモンオフィスを設けることで、多様性や融合の中から新しいイノベーションが生まれる未来を期待しています。この150周年を第一歩として、キャンパス環境の整備や研究者支援を推し進め、世界をより良く変える研究を必ずここから発信していきます。

※1 国立大学法人東海国立大学機構
名古屋大学と岐阜大学を一法人のもとに統合。両大学の持てる力を共有し、地域創生への貢献と世界屈指の研究大学への発展を目指す。2020年4月設立。

※2 指定国立大学法人
教育研究水準の著しい向上とイノベーション創出を図るため、世界最高水準の教育研究活動の展開が相当程度見込まれる国立大学法人を指定。指定された大学は出資できる企業の対象が広がるなど裁量権を拡大できる。現在9大学が選ばれている。

※3 創発的研究支援事業
特定の課題や短期目標を設定せず、多様性と融合によって破壊的イノベーションにつながるシーズの創出を目指す「創発的研究」を推進するため、既存の枠組みにとらわれない自由で挑戦的・融合的な研究を原則7年、最大10年にわたり支援する。